

# 鎌倉時代の大和国

— 興福寺と多武峯を中心に —

泉 谷 康 夫

はじめに

本稿は、興福寺と多武峯を中心にすえ、鎌倉時代の大和国における種々の階層の人達の動向をみてゆこうとするものである。かかる政治史的考察はすでに永島福太郎氏や朝倉弘氏の著書<sup>(1)</sup>の中でなされており、また奈良県の市町村史でも論及されている。また、大山喬平氏や安田次郎氏の部分的ではあるが<sup>(2)</sup>つこんだ研究も公にされている。従って、屋下に屋を架すことになるかもしれないが、先に書いた論文「摂関政治期の大和国 — 興福寺を中心として —」<sup>(3)</sup>と同じ視点で鎌倉時代も見直してみたいと考えたので、ここに論文としてまとめてみることにした。

興福寺と多武峯をとりあげたのは、先稿のつづきという意味もあるが、史料が比較的多いからでもある。引用の史料はすでに周知のものであり、改めて記すまでもないのであるが、出来るだけ具体的に史実を示し、その上で所論を展開したいと思つたので、敢て引用した。



## 一 興福寺と多武峯

平安時代の後期から鎌倉時代にかけての興福寺と多武峯寺（妙樂寺）との対立は有名であり、『多武峯略記』<sup>(5)</sup>には、これが「炎上三箇度」として記されている。興福寺は藤原氏の氏寺であり、多武峯は藤原氏の始祖鎌足の廟所であり、共に藤原氏とかかわりの深い寺院である。にもかかわらず両者がきびしく対立したのは、多武峯寺が延暦寺の末寺だったことによる。多武峯寺が延暦寺の末寺になった経緯について『多武峯略記』には次のように記されている。

遣唐使に随つて入唐していた鎌足の子定慧和尚は、鎌足の死後帰朝し、摂津国島下郡の阿威山に葬られていた遺骸を多武峯に改葬し、その上に十三重塔を建てた。その後、塔の南に講堂を建て妙樂寺と号した。これが多武峯寺の草創であるが、こののち香華を供し経を講ずる人もなく荒廃に帰していたのを、たまたまこの峯に登った賢基という人が一夜を講堂で明かし、老翁の教示でここが靈地であることを知り、寺塔を修営しここに永住した。彼は、貞観六年（八六四）勅によって延安と改名し、翌七年には供料の田戸を賜り、また檢校の官符を賜つて当寺の僧侶や御墓守の檢校に当ることになった。第四代檢校の実性は、十三才のとき多武峯に登り第二代檢校玄念について修行していたが、のち延暦寺第十二代座主になった玄鑒がまだ凡僧で修業のため一夏を多武峯で過して帰山の時、玄念の命で玄鑒に随つて延暦寺に行き、そこで出家受戒し、広く顯密二教を学び、朝家にもその名を知られるようになった。やがて実性は、延喜十九年（九一九）官符を賜り多武峯檢校になるが、天曆元年（九四七）には同寺座主に転じ、同十年（九五六）に卒した。実性の没後は、多武峯の門人が檢校となり、比叡山の門人が座主になる慣例が生じるが、先ず檢校になったのは千満で、座主には春暹が就いた。実性は死に臨み春暹に「談岑僧徒若有官奏者、必可被執達也」と遺言したので、これより以後、多武峯は自然に延暦寺の末寺になったという。



多武峯が延暦寺の末寺になったことについて、『今昔物語』は『多武峯略記』とは全く別の話を載せている。少し長くなるが引用することにする。

今昔、比叡ノ山ニ尊睿律師ト云フ人有ケリ、年来山ニ住シテ顕密ノ法ヲ学シテ止事无カリケル者也、亦極タル相人ニテナム有リケル、後ニハ京ニ下テ雲林院ニゾ住ケル、而ル間无動寺ノ慶命座主ノ未ダ年若カリケル時、阿闍梨ニテ有ケルニ、此ノ尊睿律師、慶命阿闍梨ヲ見テ、和君ハ殊ニ止事无キ相ノ限り有ル人カナ、必ズ此ノ山ノ仏法ノ棟梁ト可レ成キ相顯也、然レバ己ハ年モ老ヌレバ世ニ有テモ益不<sub>レ</sub>有ジ、此ノ己ガ僧綱ノ位和君に讓申ムニ、和君ハ関白殿ニ親ク仕ツリテ思エ御ナル人也、此由ヲ申シ給ヘト云ヒケレバ、阿闍梨心ニ喜<sub>ッ</sub>ト思テ、其由ヲ殿ニ申テケリ、殿ト申スハ御堂殿也、殿慶命阿闍梨ヲ糸惜ト思食ケル人ニテ有ケレバ、此ノ由ヲ聞食シテ、糸吉キ事也ト被<sub>レ</sub>仰テ、慶命阿闍梨ヲ尊睿ガ讓ニ依テ律師ニ被<sub>レ</sub>成テケリ、其ノ後尊睿道心ヲ発シテ、本山ヲ去テ多武峰ニ籠居テ、偏ニ後世ヲ思テ念仏ヲ唱ヘテ有ケルニ、多武ノ峰本ヨリ御廟ハ止事无ケレドモ、顕密ノ仏法ハ无カリケルニ、此ノ尊睿多武ノ峰ニ住シテ真言ノ密法ヲ弘メ、天台ノ法文ヲ教ヘ立テ、学生数出来ニケレバ、法花ノ八講ヲ行ハセ、卅講ヲ始メ置テ既ニ仏法ノ地ト成ニケルニ、尊睿此ノ所此ク仏法ノ地トハ成シツト云ヘドモ、指ル本寺无シ、同クハ此レヲ我ガ本山ノ末寺ト寄セ成テムト思ヒ得テ、尊睿彼ノ慶命座主ノ関白殿ノ思エ殊ニシテ親ク參ケルヲ以テ、殿ニ御氣色ヲ取ケレバ、殿此レヲ聞食シテ、尤モ吉キ事也ト被<sub>レ</sub>仰テ、速ニ可<sub>レ</sub>寄シト被<sub>レ</sub>仰下ニケレバ、多武峰ヲ妙樂寺ト云フ名ヲ付テ、比叡ノ山ノ末寺ニ寄成シケリ、其ノ時ニ山階寺ノ大衆此ノ事ヲ聞テ、多武ノ峰ハ大織冠ノ御廟也、然レバ尤モ山階寺ノ末寺ニコソ可<sub>レ</sub>有ケレ、何カデカ延暦寺ノ末寺ニハ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成キゾト云ヒ噉<sub>リ</sub>合テ、殿下ニ此ノ由ヲ訴ヘケレバ、殿前ニ延暦寺ノ末寺ト可<sub>レ</sub>為キ由申シ請シニ依テ、既ニ仰セ下シ畢ヌト被<sub>レ</sub>仰テ承引无カリケレバ、不<sub>レ</sub>叶ズシテ止ニケリ、



このように、尊睿（多武峯第八代座主）の延暦寺への寄進を道長が承認したことによって末寺になったとしているのである。右の『多武峯略記』の記事と『今昔物語』の話は、いずれが是でいずれが非というものでなく、恐らく、十世紀中頃から延暦寺との関係が次第に深まってゆき、十一世紀前半の道長の時代に決定的になったことを示すものであろう。平安時代の後期には、多武峯寺は延暦寺の末寺で無動寺の別院であつた。

さて、「炎上三箇度」といわれる興福寺と多武峯寺との衝突の最初は、永保元年（一〇八一）三月のことで、この時は椋橋・音石の民宅が焼失しただけであつた。ことの起りは次のとおりである。多武峯檢校円寿の命によって古木庄の内檢に赴いた弟子の玄智が、帰山の途、酒に酔ひ豊浦河原で犬を射たところ、傍にいた子牛が驚いて逃げた。それを見た子牛の持主興福寺知事円快は玄智が牛を射たと騒ぎたてたので、人々は玄智を馬から引つり落した。玄智は帰山の後このことを檢校円寿に語つたため、円寿は大いに憤り、円快を西鳥居戸まで召寄せ、拷問にかけ、今後は多武峯を決しておろそかにしないと誓わせ放免した。興福寺に歸つた円快はこのことを衆会所に訴えたため、東西両金堂衆に発向が命ぜられ、椋橋・音石の民宅焼亡に至つたのである。これにより多武峯寺中は騒動となり、興福寺との合戦に及ばんとした。しかし、寺中で人望の厚い經運上人の「若相戰者、両方人多以將死、僧侶之行業可然乎、吾不可見如此之惡事」という反対があり、檢校円寿もこれに同意し、即日上洛して関白師実事に事の子細を訴えた。そこで直ちに興福寺別当に對し發向を停止するようとの宣下があり、この時の争いは静まつたという。

第二度目の焼失は天仁元年（一一〇八）九月十一日で、この時は淨土院諸房及び院内の堂舎少々と山郷の民宅がすべて焼失した。ことの起りは次のとおりである。濟嚴大法師は、白河院の勅宣によって、ここの平等院に付屬する經藏を建立した。その後彼は、養母にすすめて高田庄近辺の所領田畠を經藏に施入させたが、養母の死後、この施入田の作手を相続した濟嚴



と同じく養子の国季の二人と舎弟高助との間に相論が生じた。国季は濟嚴を味方に引き入れ相論地の作物を茹取ろうとした。これに対し高助は、興福寺僧と相語らい興福寺知事院尊を雇い遣し、この作物を奪い取ってしまった。そこで濟嚴は大いに憤り、下僧の能樂法師を遣して院尊を凌轢させた。これによって興福寺の大衆が蜂起し、多武峯を焼払うようにと下知を下した。守延という者が大将となり傘峯から打入り、食堂・経藏・物社・大温室・多宝塔・灌頂堂・五大堂・浄土堂等を焼失させた。講堂の西簷にも火が付いたが、これは寺僧等が総出で消し止めたという。

この事件で、摂政忠実は、同月二十四日に興福寺・多武峯両方の「下手人張発輩」を追却するよう命じている。<sup>(10)</sup>これに対し同月二十九日、当時の興福寺別当覺信——師実の息で興福寺別当として「貴種始也」<sup>(11)</sup>といわれている覺信——は上洛し、大衆の使として忠実に会い、処分をいい、またこのついでに多武峯を興福寺の末寺にするよう要求している。しかし忠実は、次のように述べてその要求を拒絶している。<sup>(12)</sup>

多武峯、是山無動寺門籍之人執行来也、我時今初更不可成、御寺方、全不可裁許、又於張本輩者、已為惡事根源者、御寺多武峯人々共所追却也、更一寺不可成訴也、

第三度目の焼失は承安三年（一一七三）六月のことである。この時の興福寺大衆の蜂起については、前回及び前々回と異り、延暦寺との対立を背景とする色々の事件が重なって原因をなしており、そのためであろうか、山郷の民宅は勿論のこと、寺中の堂塔・僧坊等悉く焼き払われている。事件のはじまりは、前年の夏頃、多武峯の十禅師が末寺の坂田寺のことにより上洛した時、比叡の山王権現を多武峯に勧請することを立願し、裁許の長者宣も出たので、棕橋孕女石辺に山王宝殿を造り九月六日に山王祭を行おうとしたところ、興福寺大衆が発起僉議し、比叡神人と御墓守が比叡の權威を募り興福寺をないがしろにしようにしていると言って、中綱・仕丁を国中に下し遣し山王祭供奉の輩を責勵しその住宅を焼失せしめ、併せて権



現の社家を差し止めたという事件である。次いで、同年十二月二十四日に千代市という所で細川郷の墓守延俊という者が興福寺雜役免庄の一つである西宮庄（同寺灯油免田八町を含む）の庄司是貞の智行包に凌轢されるという事件が起き、報復のため御墓守達が西宮庄に乱入し是貞の住宅を焼いたため、興福寺大衆は再び発起し、国中に下知して多武峯僧徒の往還の路を塞いでしまうという事件にまで発展した。以上のことを多武峯が延暦寺へ子細に伝えたため、承安三年の五月二十日、叡山の大衆は大いに騒ぎたて北国にある興福寺領の諸庄園を皆悉く押妨するという挙に出た。これに対し興福寺大衆も蜂起し、多武峯を焼失することを僉議し、月末には峯の東西に関を設けて多武峯の人々の往還を止めた。六月八日に多武峯側は興福寺の設けた棕橋関を打破り、二十日から本格的な合戦が始まったという。合戦の様子は、次のように『多武峯略記』に記されている。

廿日合戦始、其合戦処者、坂田、細川、傘峯、棕橋、大道、天満峯、水越峯、小竹峯、宮奥等也、寄軍大将、小竹峯者、宇陀藤二近保、水越峯者、長谷川三郎季俊、忍坂三郎家宗、此日、山郷被焼失了、廿一日合戦、傘峯冬野許也、寄軍大将、傘峯者、長谷川主殿正経、蒙、広瀬当武者倫成、疵、池尻三郎家資、池尻四郎助成、忍海清太時直、冬野者、榎原中内光遠、北陽平太国親、布施源藏行弘、曾禰源太季方、中津尾源二忠康等也、寄軍中、死者、池尻四郎助成於傘峯死、榎原中内光遠生年十六、於冬野死、中津尾源二忠康、於湯屋谷死、忽於山内被討取者八十余人、還家後死者不知其数、峯方死者、入住法師、廿一日於傘城死、坂田郷住人久俊、同日於冬野城死、件二人許也、此日從冬野陣三百余人打入、南院坊舍四五宇焼失了、雖然無程追出於湯屋谷、数十人討取了、廿二三兩日依大雨无合戦、廿四日峯衆徒皆悉退出、廿五日当寺焼失、但淨土院南院計焼失、平等院東不焼失、此時焼失堂舍者、講堂、金堂、常行堂、十三重塔、法華堂、聖靈院、宝蔵、鐘樓、惣社、曼荼羅堂、三重塔、先德堂、食堂、大温室、淨土堂、



五大堂等也、

事件後の処置については『玉葉』や『百鍊抄』に詳しい。六月二十九日には先ず事件の最高責任者として興福寺別当尋範がその職を解かれ、七月一日には南都僧綱以下の公請が止められ、十月九日には多武峯を焼いた直接の責任者として法眼覺興が播磨国に流されている。<sup>15</sup>この事件に対する後白河上皇の態度は強硬で、七月十四日に摂政の使者光長が興福寺に伝えた院宣は、若し僧綱以下が上洛せず、また多武峯を焼いた張本人を召進しないならば、今後は興福寺の訴訟は一切受付けず、寺僧の昇進も認めず、また寺僧領は皆没官するというきびしい内容で、僉議の席において上皇は、

焼失多武峯之条、已大事也、山階寺之所為、罪科不輕、加之、別当僧正已下在京之時、可止大衆之蜂起、兼又不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>燒失多武峯之由申請下向、大略翌日炎上、已違勅答之事、不實之罪也、罪科何様可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>行哉否、

と発言したという。<sup>17</sup>このような院政々権の強硬方針に興福寺大衆も反撥し、十一月三日には春日神興（神木）を具して上洛を企て、天台衆徒と雌雄を決する由を称し、七日には宇治の平等院に至った。これには吉野（金峯山寺）の大衆も同心し加わっていた。天台衆徒もこれに応じ宇治に発向しようとしたが、「唯可<sup>レ</sup>奉任公家御制止也」という朝廷の言葉に随って発向を止めたという。<sup>18</sup>しかし、九条兼実が『玉葉』の中で、

或云、山僧等歎息外、無他事、一切不<sup>レ</sup>蜂起、已如<sup>レ</sup>失術計、唯称<sup>レ</sup>奉仕公家之御沙汰之由、然而実者廻種種之意略、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>叶故、奉<sup>レ</sup>懸公家云々、

と記しているのが本当のところであつたかもしれない。<sup>19</sup>

この事件によって春日祭は延引され、十一日からの上皇の熊野詣もその出発があやぶまれてきた。しかし、このような行為は謀叛であり違勅の罪に科すという上皇の脅しに屈し、興福寺の衆徒も十一日の暁には分散し神木も本社に帰ったが、熊<sup>22</sup>



野詣の進発はおくれ、上皇は逆鱗甚しく、即日官宣旨が出され、興福寺をはじめとする南都十五大寺の末寺・庄園は悉く没収され、その代りに仏供灯油料及び恒例の寺用は必要に応じて国司が出すという措置がとられることになった。<sup>23</sup> 十五大寺は末寺・庄園の返還を願い出たが、なかなか許されず、翌四年正月十八日に至ってやっと、「但於惡僧并師主所領者、可<sub>レ</sub>付本寺」という条件付で認められている。<sup>24</sup>

以上述べてきた興福寺と多武峯の対立の背景に、僧綱の人事権の掌握を図る院が、南都諸宗の僧綱昇任方式に介入をはじめ、人事に強く介入し、寺僧を厳しく処罰するようになったとの元木泰雄氏の指摘があり、<sup>25</sup> 鳥羽院政までのこのような方針を承け継いだ後白河上皇は、保元の新制を発して更に寺院に対する統制を強化し、この結果、政治権力と寺院勢力との結合と対立が尖鋭な形態をとって展開するようになり、寺院は政治権力との結合をめぐる互に争い、寺院相互間の対立も激化したとの田中文英氏の指摘がある。<sup>26</sup> 妥当な見解である。従って、この問題についてはこれ以上立入らず、節を改めて、この争乱にまき込まれた農民の問題について少し詳しく検討を加えることにしたい。

## 二 寺院と農民

多武峯二度焼失の発端は、寺僧の永作手をめぐる相論であった。この永作手は、済嚴大法師等の養母が永作手を保留したまま領主職を平等院経蔵に寄進した結果生じたもので、その相続をめぐる済嚴等が争ったのであった。<sup>27</sup> 永作手は——のちの作主職は——、所当公事の未進があれば領主（地主）の進退するところであったが、百姓の中には領主の進退から逃れるため自己の作主職を偽って寺僧の所領と称するものもあり、寺僧の有する永作手すなわち作主職にはこのようなものも



あったようである。そこで、嘉暦元年（一三二六）十二月五日の多武峯の満寺評定に基づく「重記録」<sup>(29)</sup>の第一条には、これの禁止が定められている。参考までに、多武峯でのこの評定の決定事項を示すと次のとおりである。

### 重記録

嘉暦元年丙寅十二月五日

### 満寺評定條

一、於郷内寺領田畠作主職者、可<sub>レ</sub>為領主之進退、兼又於作人等三箇大犯出来時者、可<sub>レ</sub>為地主之進止、曾不<sub>レ</sub>可有公方之檢斷者也、又於屋舍并資財者、公方可<sub>レ</sub>收<sub>レ</sub>公之、加之、百姓等為<sub>レ</sub>募權威奸憑主人、或号<sub>レ</sub>売買之職、或称<sub>レ</sub>有由緒、属有縁之寺僧致其煩事有之、永可<sub>レ</sub>停止其綺也、大方不可<sub>レ</sub>有寺僧之口入、衆議畢、

一、郷内面々、寺僧私領之竹木等盜切輩之罪科之事、

准御陵山之科条、可<sub>レ</sub>為老實文之科怠、又同可<sub>レ</sub>為地主之沙汰、更不可<sub>レ</sub>有余方之綺者也、

一、三ヶ大犯輩之部屋檢符事、有資財贓物者、則檢斷庭可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>沒收之、若無罪科人之私財物者、空部屋不可<sub>レ</sub>付公方之封、動及坊主之煩之間、如此儀切畢

一、付田畠等、於先例有限所当公事等無未進対捍者、雖<sub>レ</sub>為地主之進退、不可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>取上之由、満寺衆議畢、

右の評定事項に示されているとおり、郷民、すなわち、東は棕橋大峯・堀越・都子尾を限り、南は吉野・垣娥野峯を限り、西は彈琴尾並びに志波尾・彈琴谷を限り、北は阿由谷・鷹取峯を限る四至内の住民<sup>(30)</sup>——多武峯寺を中心とする寺領内の住民——の中には、作主職の名目的寄進を通して寺僧と深く結びついていた者もあったのである。農民は農民で自己の土地を確



保するためにいろいろと策を廻らしたのであり、寺僧達もこの農民の期待に応える必要があり、次節で引く「三輩一同之群議」で述べられているような寺僧の悪党的行動にはそれが多少とも反映していたとみてよいようである。

郷民の存在形態については、右以外に史料がなく、推測の域を出ないが、一円所領の庄園の庄民に準じて考えて大過ないと思われる。田畠の作主職の多くは郷民が所持していたであろうが、右述のとおり寺僧の有する場合もあり、また右に引用した「重記録」の中に「郷内面々、寺僧私領之竹木等盜切輩之罪科之事」の一ケ条があるのによって知られるとおり、山野の多くは寺僧領になっていた。このように郷民の生活は寺僧によって強く規制されていたが、所当公事の未進対捍さなければ田畠に対する権利——その多くは作主職と考えられる——は保障され、また、国衙の——大和国であるから中世では興福寺の——賦課から遁れることができた。興福寺との争における三度に及ぶ舎宅の焼亡については、それに見合う保障が多武峯寺からあったと考えてよいであろう。

さて、興福寺と多武峯寺との合戦で、その一因をつくったものに御墓守がある。多武峯は鎌足の墓所であり、『多武峯略記』によると、清和天皇の時から墓守として徭丁が置かれるようになり、御墓守というのはそれが発展したものである。徭丁は、最初に置かれた貞観七年（八六五）には定員十八人であり、その後多少の増減はみられるが、十世紀中頃まであまり変りはなかった。ところが頼通の時代には——十一世紀の前半には——百八十人となり、治承元年（一一七七）に観意が検校になった時には七百余人にふくれあがっていた。余りに多いというので兼実が摂政のとき主水司を通して興福寺から訴訟があり、その減員が問題となり、建久四年（一一九三）に至って定員は三百六十人と定められたという。

この多武峯の御墓守は、寄人に準じて考えるべきもののようである。寄人についてはすでに詳しく述べたことがあるので再説しないが、要点を記すと次のとおりである。寄人というのは初期庄園の耕作者として臨時雑役を免除された者であり、



十世紀中頃から史料上に現れる。これは、公民が臨時雜役を免れるため権門寺社と結びつき、一方権門寺社も庄園の労働力を確保するため臨時雜役の免除を国司に迫った結果成立したもので、十世紀後半から十一世紀前半にかけて著しく増加する。しかし、十一世紀後半に至り、領域的支配を原則とする寄進型庄園の時代に入ると、庄園領主は庄内居住の農民を庄民という形で把握し労働力を確保するようになるので、寄人と庄田の耕作との関係はなくなり、権門寺社、特に寺社との隷屬關係<sup>32</sup>だけが残ってゆく。

御墓守と寄人とを比較すると、極めて共通点が多い。御墓守には初め徭丁があてられた。墓守となった徭丁は、当然課役が免除されていたと考えられる。律令制の課役の多くは九世紀末から次第に田率賦課に代り、臨時雜役とは直接つながらないが、鎌足の墳墓に仕える御墓守に対しては何らかの優遇措置がこうじられていたはずであり、それは臨時雜役の免除以外には考えられない。また、寄人の著しく増加する十世紀後半から十一世紀前半にかけての時期に、御墓守もまた著しく増加している。なお、寄人は権門寺社の庄内に居住するとは限らなかったが、御墓守も『多武峯略記』に「東西諸郡御墓守」と記されていることから知られるように、寺域内に居住する郷民ではなかった。

十一世紀後半以降、寄人は庄田の耕作と無關係になるが、保元元年（一一五六）の新制の第四条<sup>33</sup>には、

一、可令仰本寺并国司、停止諸寺諸山惡僧行事、

興福寺、延曆寺、園城寺、熊野山、金峯山、

仰、惡僧凶暴禁遏惟重、而彼三寺兩山、夏衆、彼岸衆、先達、寄人等、或号僧供料加増出舉利、或称舍頭料、掠取公私物、若斯之類寔蕃有徒、国之損害、莫大於此、慥加懲肅、勿令違犯、（下略）

とみえるから、寺院の權威を募る行為をなお行っていた。十一世紀後半以降も御墓守に対し臨時雜役が免除されていたか否



かは不明であるが、<sup>35)</sup>権威を募る行為は御墓守も行っていた。『多武峯略記』には「御墓守権威」として、次のような話が載っている。

寿永元年十二月十九日、御墓守等押寄前武者所当麻倫康住宅之處、出数武士等令殺害御墓守二人了、蒙疵者数多、件倫康者、三位中将重衡<sup>平人</sup>之家人也、仍号彼権威致此逆惡、然而自峯頻訴申殿下之間、平重相不能拘留、以同年二月廿日令出件倫康、同日戌時、於殿下内外安判官資成請取了、当殿下前摂政御時也、其後彼住宅等、不殘一度成荒陵之地了、建久七年十月一日、磯野郷住人義弁法師等、殺害御墓守長紀助頼了、件義弁等或号地頭仲教入道家人、或称興福寺東西堂舎守人、然而注子細訴申之日、以同年八月晦日、庁使可掬進彼等之由、長者宣下、同七月九日庁使下着磯野了、義弁等暗跡逃隱、其住宅等如倫康之例、仍上代如此之例、不遑毛挙、重仰権勢、以如此、

右にみえるように、平氏政權下であるにもかかわらず、平重衡は、御墓守二人を殺害した家人の当麻倫康をかくまいさげず、御墓守の訴えの前に、倫康を檢非違使に渡さなければならなかったのである。また、御墓守長紀助頼を殺害した義弁は、地頭仲教入道の家人あるいは興福寺東西堂舎守人と称し、幕府や興福寺の権威を募っていたが、御墓守の訴えにより檢非違使の下向となり、跡をくらし逃亡しなければならなかったのである。

御墓守の背後には、多武峯→延暦寺という寺院と、鎌足を始祖とする摂関家という二つの強力な権閥がひかえていた。従って、御墓守達は、その権勢をかりて大きな力を大和国内で發揮することができたのであり、多くの有力農民が御墓守になつていたのである。

以上のような御墓守も、次節で述べるように、延暦寺の力が大和国に及ばなくなり、一方において幕府の力が大きく大和



国に及んでくるようになると、史料上からその姿を消してしまふ。そこで次に、中央政界の動向と、それに対する大和国の諸階層の反応をみてゆくことにしたい。

### 三 寺院の二つの階層

寛治七年（一〇九三）八月二十二日、興福寺大衆は奏状を献上し、近江守高階為家が近江国市庄で春日神人を打凌し禁獄したので、彼を遠流の罪に処し、子孫・家族はその官職を停めるようにしてほしいと要求した。しかし、裁報がなかったので、二十六日に至り大衆は春日神民を率い神木を捧げ春日社の鏡鈴を隨身して上洛し、勸学院に集会し噉訴に及んだ。翌二十七日に陣定が行われ、為家は配流（土佐国）、嫡子為章は連坐を免除、四男阿波守為遠は停任と決ったが、その宣旨は院宣によって延引し翌二十八日になったという。<sup>36</sup> 為家は院の近臣であつたが、当時は白河院政の初で院政政権のまだ確立していなかつた時期なので、院は興福寺への裁報を延ばしたり、陣定の決定の実施を渋つたが、為章を「臨時之恩」で連坐から除いただけで、それ以上のことは為しえなかつたようである。

大衆が上洛し噉訴を行うには順序があつた。これについては、建久九年（一一九八）興福寺が源頼朝に送つた啓状に、<sup>37</sup> 次のようにみえている。

衆徒参洛、誠為大儀、為世爲寺、不好不勇、但触寺社有大訴之時、先言上長者、次進奏状、其後三綱五師僧綱等次第参上、若猶裁報有滯者、及衆徒之進発、其儀則擬聖僧之影向、荷道具於肩上、促明神之雲駕、粧御鏡於櫛末、神官寺僧濟々焉扈從、



上洛すると大衆は勸学院に着き、そこで興福寺俗別当でもある勸学院弁別当を介して氏長者<sup>(40)</sup>（摂政もしくは関白）と交渉した。早速、陣座において公郷の僉議が行われ、結果は上奏され、裁許があれば宣旨が出されるというのが本来の手順である。右の高階為家に対する嗾訴事件は、おおよそ順序どおりに事がはこばれている。

天仁元年（一一〇八）の多武峯二度焼亡のさい、その報が入ると、摂政忠実<sup>(41)</sup>は密かに白河上皇と会い、その翌日、主要な公卿を忠実の許に召集して前後策を講じ、結果を院に報告している。このとき興福寺大衆上洛のうわさはあったが、忠実の適切な処置によって蜂起には至らなかった。承安三年（一一七三）の第三度焼亡のさいには、第一節で述べたように、神木動座、大衆の発向に及んだ。この大衆蜂起について、九条兼実<sup>(42)</sup>は次のように記している。

南北大衆蜂起、凡無可止之期、云々、或人云、長者御沙汰懈怠之故、及大事云々、但南都不用長者宣、力不及事歟、

後白河院政期における当時の関白基房の無力さが指摘されているが、事件のその後の経過も、そのことを如実に示している。事件の処理については、陣座で公卿が審議することなく、直ちに院中で僉議があり、すべては院宣によって決せられている。大衆の許に基房から使者が派遣されているが、院宣を賜ってその内容を伝えるために下向したものであった。<sup>(43)</sup>

右のような中央における権力者の変化に興福寺大衆は敏感に反応していたのであり、それが先記の「南都不用長者宣」となったのであった。

建久九年（一一九八）、後鳥羽上皇の熊野御幸のため和泉国司平宗信はその課役を国内に課したが、そのさい、興福寺領庄園に対する免除を行わなかったため紛争が生じた。<sup>(44)</sup> 興福寺大衆は、寺領谷川庄において寺家の仕丁が簀巻にされ法湯をかけられほとんど悶絶に及ぶという暴行をうけ、かつ庄民からは色々の物が徴取されたといい、春日社領春木庄においても神



人が簀卷にされ、また神木の榊が焼捨てられたといい、その外池田庄においても種々の狼藉を行ったといい、宗信の処分を要求して蜂起した。十月十四日に宗信の国務を停止し目代を檢非違使庁に召禁するという長者宣が出されたが、大衆は国司の流罪を主張して譲らず、二十一日に院中において議定があった。しかしなかなか結論は出ず、十一月二十七日に至ってやっと宗信を播磨国に配流との院宣が出され、事件は落着をみた。しかし、衆徒の張本として興福寺の已講玄俊は佐渡国へ配流となった。このような延引の後の決着は、和泉国が院の知行国であり宗信が院の近臣<sup>16</sup>だったからであろうが、この事件で最も注目すべきは、このような朝廷と寺との関係でなく、鎌倉幕府との関係である。それは、事件の最中に、興福寺の大衆が源頼朝に啓状を送り、朝政へ口入し興福寺の主張が通るようにしてほしいと要望したことである<sup>16</sup>。当時の最高権力者が、後鳥羽上皇でなく、頼朝であると認識していたからであろう。この啓状の署名は、大衆を代表する上級僧侶の僧綱・已講・三綱等でなく、別会五師であった。すなわち、ここでも、権力者の変化に対する興福寺大衆の素早い反応がみられるのであり、それは、形式の枠にとらわれない下級僧侶の反応であった。しかし頼朝は、この大衆の要望に応えず、朝政への口入はしなかった。

中央政界の動向と興福寺との関係をよく示す次に起った事件は、南山城の興福寺領大住庄<sup>17</sup>と石清水八幡宮寺領薪庄との用水相論に端を発する両寺の衝突である<sup>18</sup>。

嘉禎元年（一二三五）五月、両寺の相論の解決に協力するようにとの要望が朝廷から六波羅にあり、その処置についての指示を求める使者が二十三日に鎌倉に到着した。鎌倉の意見は、現地に実検使を派遣し、その上で議定すればよいであろうということであった。六波羅から派遣された武士の監視の下で実検を行うのである。六月三日に実検使が派遣されることになったが、それ以前に南都の衆徒（東西両金堂衆）は薪庄の在家六十余家を焼払い八幡神人を殺害した。しかし、六波羅の



軍勢の出動を知り逐電してしまった。このような中で、九日に実検使が派遣されたが、興福寺側の使者が来ないため実検は実施されなかった。ともかくこのように、鎌倉の指示どおりに事ははこばれていったのである。

閏六月に入り、八幡神人が神輿を宿院に渡し、讒訴に及ぶという八幡宮寺側の反撃がはじまった。当時朝廷の実権を掌握していた九条道家は、公卿を召集して議すると共に、石清水八幡宮寺権別当宗清以下を召して神輿の帰座を促している。このような八幡宮寺側の動きに応じて興福寺衆徒も再び蜂起し、事態を処理できない興福寺別当円実は上表して辞職してしまった。八幡宮寺側の要求はいろいろあったが、道家が因幡国を修理料所として与えることを認めたため、御輿は無事本宮に帰座した。こうして八幡神人の讒訴は治ったが、これで事件が完全に落着いたのではなかった。

十二月に入り、八幡神人が大住庄で春日神人を殺害するという事件が起り、二十一日に興福寺衆徒は、八幡宮寺別当宗清を流罪にすること、薪庄を興福寺領とすること、春日神人殺害の下手人を禁獄に処することの三ヶ条を要求し、春日神木を捧げて再度讒訴に及んだ。道家は直廬に公卿を集め僉議を行ったが、衆徒はあくまで宗清の配流を要求したため為すべがなく「執柄家并藤氏公卿、皆以閉門」し、事件の処理を放棄してしまった。このことは直ちに六波羅から鎌倉に報告された。北条泰時は評定衆を集めて協議し、直接事件の解決にのり出した。このような中で、翌二年正月、神木帰座、寺社開門を促す権別当円玄等に宛てた長者宣が出されているが、その拒否の返事は、衆中群議の結果として別会五師長忠の名でなされている。僧綱・已講等の上層部と多数を占める下級僧侶との考え方の違いが読みとれる。

事件は越年したが、二月十四日幕府の使者後藤基綱が上洛し、神木御座所の木津川辺で衆徒と会い幕府の意向を伝えた。衆徒はそれに承伏し、ここに事件は落着をみた。『百練抄』にはこの間の事情が、

春日御神木、自宇治還御本社、々司神人等少々扈徒、衆徒不供奉、関東有嚴密之命、衆徒成恐怖之思歟、



と記されている。<sup>50</sup> 強硬な幕府の姿勢に衆徒が屈したものだと思われる。

幕府の強圧の前に一旦は終息した興福寺と石清水八幡宮寺との争いであるが、宮寺別当宗清の処分がなされないところから、七月に至り再燃し、興福寺の衆徒はまた蜂起して神木を金堂に移した。『春日社司祐茂日記』には、この時の衆徒の決意が次のように記されている。<sup>51</sup>

武士可乱入<sub>レ</sub>之由、雖<sub>レ</sub>不聞及、社家如被<sub>レ</sub>申者、若然者、六方衆徒、社司、氏人、神人參<sub>レ</sub>籠金堂前、可<sub>二</sub>焼死<sub>一</sub>之由有衆議<sub>一</sub>、

幕府は八月に後藤基綱を再び派遣して鎮定に当らせ、十月には更に「殊勝勇敢壯力之輩」<sup>52</sup>を選抜して上洛させると共に、大和国に守護を置き、寺僧領を没収してそこに地頭を補した。また畿内近国の御家人達に命じて南都の道路を塞ぎ、人々の出入を止め、衆徒達の糧道を断ってしまった。この強硬措置により衆徒は完全に屈服して寺中から退散し、寺の門は開かれや々と平常に復した。そうして十一月には、大和国の守護・地頭も停止された。

長期にわたるこの事件で先ず注意されるのは、幕府の力で解決したということであり、次は、衆徒の中心が僧綱・已講等の上級僧侶から五師を中心に結束した下級僧侶に移っていたということである。更に付け加えるならば、幕府の使者後藤基綱が嘉禎二年二月に衆徒を説得し神木を帰座させたとき、基綱を助けて「輝関東威勢、潜又加諷詞」<sup>53</sup>、また十月の地頭設置にさいしては、密々に寺僧領の所在を基綱に知らせ地頭設置に協力した武蔵得業隆円の如き寺僧のいたことも注目すべきであろう。

さて、僧綱・已講等が興福寺内での力を失い、五師を中心に結束した下級僧侶達が大きな力をもつようになったことは、次の『葉黄記』の記事にみえるのとおり、寛元四年（一二四六）の衆徒の蜂起においてもみられる。



參殿、興福寺衆徒、彼五師三綱直申訴訟於院、太非先例、仍予追歸了、

このときは、院の近臣葉室定嗣によって追歸されているが、五師三綱等は嵯峨上皇に直訴に及んでいるのである。このような傾向は、他の寺院においてもみられるところである。『多武峯大札禁制条々』<sup>(6)</sup>中の正中年（一三三五）二月の「三輩一同之群議」は、多武峯も興福寺と同様の状態にあったことを示している。すでに『桜井町史』で紹介されている史料であるが、興味ある内容なので、次に全文を引用することにした。

#### 一、未頭三番烽起之事

右、近年挾別心之輩、為遂私宿意、不經三輩一同之群議、相語未頭三番、称滿寺衆議、行理不尽罪科之条、寺門之衰微、他門之嘲弄職而由斯、不可不誠、自今以後永停止之、若背制符令烽起者、本人急可相防之、縱其身雖為緩怠、則滿寺隨聞及莅彼所、任法加一同治罰、被沒收坊舍所領、可追却其身矣、

#### 一、停止一類烽起不可引入國中軍勢事

右、未頭三番張行既以停止、況於私烽起乎、然一類之族、任貧欲憑威勢、相語門弟等、成私烽起、引入國中之凶類、致縱橫之官領、令陵辱孤獨僧侶之条、諸人愁寺門陵遲、何事如之哉、加之、於寺中郷内、閤寺家三綱、不得滿寺評定、致私檢斷云々、此条背先規畢、自今以後停止之、若於違犯之罪科者、坊舍所領其身可任先条矣、

#### 一、狼藉人出来時可致対治事

右、猛惡之族不顧後勸、或押寄坊舍温室等、或伺路次往還之隙、致狼藉之時者、称強盜殺害人撞卓鐘、



可令動搖、然滿寺相向其庭、可加嚴密對治、以牢籠之次、盜取資財等之輩罪科、又同前矣、

## 一、打坊舍切門戶罪科之事

右、凶害好惡之輩、近年動打坊舍切門戶之条、匪啻与当座之恥辱、併招後日喧嘩者哉、所行之至太不可然、向後永停止之、若於違犯之輩者、尋搜名跡、可被處罪科矣、

## 一、真宗房榮珍罪科事

右子細者、相語二類凶徒并國中惡党等、正中二年正月廿八日之夜中、打入靜心院、悉奪取真俗之要具、剩及師匠殺害之企、訪之章条、教令違犯之至極也、設雖為俗家之徒類、爭輕刑罰、況於釈門之軌範、豈存豫議哉、仍准師匠殺害之惡行、被處常赦不免之重科畢、為後惡嚴制之龜鏡、不可及後日之沙汰、若於致取統之仁者、可被處同科矣、

## 一、甲乙寺僧致相論時可有沙汰事

右、坊舍付属遺領之支配以下、於諸篇時、止噉々敵論、属于靜謐、於寺家被究訴陳、可蒙滿寺之評判衆議之時、不論親疎、不憚威勢、守起請旨、可被無想之意見、若衆議難一決者、進入訴陳狀殿中、請文殿勘狀、可仰長者御裁許、不相待沙汰之落着、於中間狼藉者、縱雖為理訴、被處非拋、可被付論所於隱便方、於罪科者子細同前矣、

## 一、寺領興行時可停止緣坐口入事

右、或云重職寺領、或云諸免田、可令有限寺用之處、(付所説カ)國中惡党等、依令捍妨年貢、致興行沙汰之時、寺僧還引級彼凶徒、加無理口入之条、不知愚之所致也、向後永令停止畢、若於背制符之輩者、可令



弁濟抑留之年貢矣、

以前条々禁制如<sub>レ</sub>斯、凡合戰鬪爭者、律令之禁固格条之制法也、其罪尤甚、繼素爭不<sub>レ</sub>恐乎、而為<sub>二</sub>僧徒群集之地、仏法修學之寺、動逐其節、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>禁、仍為<sub>二</sub>三輩一同之群議、所<sub>レ</sub>録制符也、尽未來際堅守此旨、敢不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>違失矣、

正中二年乙丑二月日

前檢校法印大和尚位 賢弁判

前檢校法印大和尚位 濟純判

前檢校法印大和尚位 濟乘判

前檢校法印大和尚位 宗快判

前檢校法印大和尚位 源宣判

阿闍梨伝灯大法師 成算判

阿闍梨伝灯大法師 慶智判

十 禪 師 源覺判

十 禪 師 賴尊判

檢校法印權少僧都 快賢判

十 禪 師 覺尊判

上座權律師 良範判



十 禪 師 信賀判

寺主法眼和尚位 榮宜判

十 禪 師 淨幸判

都維那師法橋上人位 英融判

右で三輩というのは、その署名からみて、檢校及び檢校経験者と十禪師と三綱の三者であらう。第一条にみえる末頭三番というのは、恐らく、まだ三輩の地位に就いたことのない有力な僧侶のことと思われる。末頭三番蜂起というのは、従つて、興福寺において別会五師を中心に蜂起が行われたのと同種の事象とみてよいのである。第二条にみえる一類蜂起は、このような上層部の寺中に対する統制の弱体化によつてもたらされたもので、下剋上ともいふべき現象である。興福寺ではすでに宝治二年（一二四八）に、寺中衆と若党衆が争ひ、別当が更迭されるという事件が生じている。<sup>55</sup> 第三・四・五条にみえる狼藉人あるいは悪党の侵入というようなことも、統制力の弱体化からくる内部の対立抗争が背景としてあり、そこから生じたものと考えてよからう。第六・七条は、実力（武力）による所領の支配を止めようとしたものであるが、これも上層部の支配力の弱体化によつてもたらされた事象であるといえる。

なお、興福寺と多武峯との衝突は鎌倉時代に入つても継続するが、<sup>57</sup> 第六条に「若衆議難一決者、進<sup>56</sup>入訴陳狀殿中」、請文殿勘狀、可<sup>58</sup>仰長者御裁許」とみえるところから推測すると、一類蜂起の輩はともかく、三輩一同は、当時における興福寺の大和国支配を認め、延暦寺との關係を絶つていたものと思われる。

さて、「三輩一同之群議」でみられるのは、下層の僧侶達が旧来の枠にとられず自己の利害に則して行動しようとしたのに対し、上層の僧侶達が、旧来の秩序を維持することによつて従来の特權を維持しようとした姿であつた。しかし、次の



南北朝期に入ると、寺院の上層部も、時態の推移に適應し、新しい動きを示すようになる。その点を『御挙状等執筆引付』<sup>88</sup>を通して最後に垣間見ておきたい。

『御挙状等執筆引付』は、故上座法眼泰尊が書留めてきた観応元年（一二三五〇）から延文二年（一二三五六）までの文書の控を、応永九年（一四〇二）に泰信が借うけ書写したものである。別当孝覚の意を承けて法印懷雅・公憲の書いた奉書がほとんどであるが、孝覚の直状も少し含まれている。内容は、大部分が、庄園関係の訴状と寺僧補任等のための挙状である。奉書の宛所がその内容によって異なるのは当然であるが、同じ内容であっても宛所が異なる場合がある。まず、次の文和四年（一二三五）の二つの文書に注目したい。

（A）当寺領播磨国山階庄間事、給主尊守得業状如此、子細見状候歟、十二大会重色之旧領候、云「兵糧米催促」、云「新補下司、止其煩」、可「令下知」給候者、可「為御本意之由、別当前大僧正御房御消息所」候也、恐々謹言、

十月九日

法印公憲

謹上 赤松師律師御房

（B）興福寺領播磨州山階庄<sup>（赤松）</sup>兵糧以下事、雜掌申状如此、子細見状候歟、寺社嚴重料所候、可「停止」催促之旨、被「下知」守護候之様、可「令申沙汰」給之由、別当大僧正御房御消息所候也、恐々謹言、

十一月四日

法印公憲

斎藤左衛門入道殿

当時、庄園における武士の濫妨を停止するようにとの訴えは幕府または守護に対し出されているが、この場合、先に播磨守護赤松則祐に停止を求め、その後で幕府に訴えているのである。すなわち、幕府から守護へというような順序を経ず、直接



当事者との交渉に入っているのである。

挙状の場合をみてみよう。次の文和四年の挙状は昇進に関するものであるが、衆徒僉議の結果であるとして二人の昇進を求め、それを再度寺家として朝廷へ申し入れているのであり、この点に注目したいのである。

(A)□専・円専昇進事、衆徒僉議狀如<sub>レ</sub>此、子細見<sub>レ</sub>狀候歟、忝可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>申御沙汰<sub>一</sub>候哉之由候也、恐惶謹言、

十月四日

権大僧都公憲

謹上 右大弁宰相殿

(B)□専・円専昇進事、衆徒重僉議狀如<sub>レ</sub>此、子細見<sub>レ</sub>狀候歟、忝可<sub>ト</sub>令<sub>二</sub>申沙汰<sub>一</sub>給<sub>レ</sub>候乎之由候也、恐惶謹言、

十月十四日

法印公憲

□□ 右大弁宰相殿

以上のように、不十分ではあるが、下剋上ともいうべき事態の推移に対応した興福寺上層部の動きがみられるのである。

## むすび

以上、三節にわたって述べてきたことをここでまとめると、おおよそ次のようになる。鎌倉時代に入ると、興福寺内では、下剋上ともいうべき現象が起ってきた。このような現象は多武峯においても認められる。興福寺では僧綱・已講などの上層部が事態の推移に適宜対応し、一定の譲歩を示すなど、どうにか問題を処理してきたが、どうしても事件の処理が不可能な時は、強力な軍勢力を有する鎌倉幕府が乗り出してきた。そのため下剋上の動きが顕在化することはほとんどなかった。多



武峯寺においても事態は同じであったと思われるが、多武峯寺の上層部をなす三輩一同は、「三輩一同之群議」を定め、やや強圧的に問題を処理しようとしているのが認められる。なお、寺僧の多くが在地とのかかわりを有したことから、興福寺や多武峯寺におけるかかる事象は、寺中だけの問題でなく、大和国全体にかかわる問題でもあった。

鎌倉時代の中頃から大和国の支配権を一応確保してきた興福寺は、南北朝期には北朝と結びついてきたため、足利義満による統一後は、その被護下に入り、支配の安定をうることになるが、その後の幕府権力の失墜は、下剋上の動きを表面化させ、大和国の衆徒・国民は、中央政界の動向に左右されながら、複雑な動きを示すことになるようである。

〔注〕

(1) 永島福太郎著『奈良文化の伝流』（昭和二六年）、同著『奈良』（昭和三八年）、同著『奈良県の歴史』（昭和四六年）。朝倉弘著『奈良県史 第11巻 大和武士』（平成五年）。

(2) 大山喬平「近衛家と南都一乗院」（岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究 下』所収、昭和六〇年）。安田次郎「永仁の南都闘乱」（『お茶の水史学』第三〇号所収、昭和六二年）。

(3) 山中裕編『撰関時代と古記録』所収（平成三年）。

(4) 興福寺と多武峯との関係について最も詳しく論及したのは『桜井町史』（秋永政孝氏執筆分。昭和三二年）である。朝倉弘氏も注（1）所載の著書中で触れておられる。また、藤木邦彦「多武峯と衆徒・神人」（同著『平安王朝の政治と制度』所収、平成三年）も簡単だが両者の関係が要領よく述べられている。

(5) 『大日本仏教全書』（寺誌叢書）所収。



(6) 延喜諸陵寮式に、多武峯墓は「贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣」の墓と記されているところから、不比等の墓との説もあるが、通説に従い鎌足の墓とする。

(7) 『今昔物語』巻第卅一、多武峯成比叡山末寺語第廿四。

(8) 『多武峯略記』、『玉葉』承安三年七月二十一日条参照。

(9) 以下の叙述は、特に注記のない限り、『多武峯略記』第九炎上三箇度条による。

(10) 『中右記』天仁元年九月二十四日条。

(11) 『興福寺別当次第』巻之第一。

(12) 『中右記』天仁元年九月二十九日条。

(13) 『百鍊抄』第八、承安三年六月二十九日条。

(14) 『玉葉』承安三年七月一日条。

(15) 『百鍊抄』第八、承安三年十月九日条。

(16) 『玉葉』承安三年七月十四日条。なお、この問題については、田中英文「後白河院政期の政治権力と権門寺院」(『日本史研究』第

二五〇号所収、昭和五八年) 参照。

(17) 『玉葉』承安三年七月七日条。

(18) 『平安遺文』三六四六号文書。

(19) 『百鍊抄』第八、承安三年十一月七日条。

(20) 『玉葉』承安三年七月三日条。



(21) 『百鍊抄』第八、承安三年十一月六日条。『玉葉』同年同月七日条。

(22) 『玉葉』承安三年十一月十一・十二日条。

(23) 『百鍊抄』第八、承安三年十一月十一日条。『玉葉』承安三年十一月十二日条。『多武峯略記』。

(24) 『平安遺文』三六五号文書。但し、これは同時に没収された東大寺領に関するものであり、興福寺関係の史料は残っていない。

なお、返還許可がなかなか出なかったことについては、『玉葉』承安三年十二月四日条に記されている。

(25) 元木泰雄「院政期政治史の構造と展開」(『日本史研究』第二八三号所収、昭和六一年)。

(26) 田中文英、前掲論文。

(27) 『多武峯略記』第九炎上三箇度。

(28) 永作手から作職の変化については、泉谷康夫「作手に関する一考察」(同著『律令制度崩壊過程の研究』所収、昭和四七年)参照。

(29) 『多武峯大札禁制条々』の「重記録」である。この史料はすでに『桜井町史』で紹介されているが、引用にあたり内閣文庫所蔵の写本により訂正したところがある。

(30) 四至は『多武峯略記』による。のち四郷と呼ばれる細川・高家・治道・梶橋の住民である(『桜井町史』―前掲―)。

(31) 泉谷康夫「寄人と庄園整理」(財団法人古代学協会編『後期摂関時代史の研究』所収、平成二年。のち同著『日本中世社会成立史の研究』に再録)。

(32) 神社の場合は神人と称されるので、寄人の呼称の残るのは寺院だけのようである。

(33) この点に関しては、さしあたり、泉谷康夫「名役・在家役・棟別銭」(『日本歴史』第五〇一号所収、平成二年。のち同著『日本中世社会成立史の研究』に再録)を参照されたい。



(34) 『続左丞抄』第一。『兵範記』保元元年閏九月十八日条。

(35) 鎌倉時代に入ってから興福寺が御墓守の減員を訴えているのは造興福寺役等の賦課に支障があったからではないかと思われるのであり、かかる点から、十二世紀後半以降も御墓守に対して臨時雑役が免除されていたのではないかと思われる。しかし確証はない。

(36) 以上、『大日本史料』第三編之二、寛治七年八月二十六日条参照。

(39) 橋本義彦「院政政権の一考察」(『書陵部紀要』第四号所収、昭和二九年。のち同著『平安貴族社会の研究』に再録)参照。

(38) 『本朝世紀』康和五年十二月二十日条。

(39) 『大日本史料』第四編之五、建久九年十一月一日条。

(40) 興福寺俗別当と勸学院弁別当との関係、また撰闍家(氏長者)との関係等については、岡野浩二「興福寺俗別当と勸学院」(『仏教史学研究』第三四卷第二号所収、平成三年)を参照されたい。

(41) 『中右記』天仁元年九月十五・十六日条。

(42) 『玉葉』承安三年五月二十九日条。

(43) 以上、いずれも『玉葉』承安三年六・七月条による。

(44) 以下、この事件については、『大日本史料』第四編之五、建久九年十月十六日、同年十一月一日、同年十二月十六日の各条による。

(45) この点に関しては、堀内和明「鎌倉前期村落上層の存在形態について」(北山茂夫追悼日本史学論集「歴史における政治と民衆」所収、昭和六一年)を参照されたい。

(46) 建久九年十一月一日付興福寺牒状(『大日本史料』第四編之五、同日条)。

(47) この事件に論及した論考は永島福太郎「大和守護職考」(『歴史地理』第六八号、昭和二一年)以下多いが、『大日本史料』(第五



編之十）に分散し収載されている（嘉禎元年五月十六日から翌二年十一月十四日までの間）関係史料により、以下事件の概略を記すことにする。ただし、史料を直接引用した部分は別に注記する。

- (48) 橋本義彦「院評定制について」（『日本歴史』第三六一号所収、昭和四五年。のち同著『平安貴族社会の研究』に再録）、本郷和人「鎌倉時代の朝廷訴訟に関する一考察」（石井進編『中世の人と政治』所収、昭和六三年）参照。

- (49) 『吾妻鏡』嘉禎元年十二月二十九日条。

- (50) 『百鍊抄』第十四、嘉禎二年二月二十一日条。

- (51) 『春日社司祐茂日記』嘉禎二年九月五日条。

- (52) 『吾妻鏡』嘉禎二年十月五日条。

- (53) 『吾妻鏡』嘉禎二年三月二十一日条。

- (54) 『葉黄記』寛元四年八月二十八日条。

- (55) 『桜井町史』で秋永政孝氏が紹介するさいに用いられた写本と内閣文庫所蔵の写本とは異なるようである。「三輩一同之群議」も、引用に当り、内閣文庫所蔵の写本により訂正したところがある。

- (56) 『大日本史料』第五編之二十六、宝治二年八月七・十三両日条。同第五編之二十七、宝治二年十二月二十八日、同年閏十二月一・二十一両日条。

- (57) 『桜井町史』参照。興福寺衆徒が多武峯の事を訴え神木を奉じて入京した最後は、鎌倉時代も終りに近い正和三年である。

- (58) 内閣文庫所蔵、大乘院文書。